【ポスター発表】

学内学会活動によるコミュニティー・ソーシャルワークの試み

エッセイ「そんなのを勉強して仕事につける？」制作裏噺

○　鹿児島国際大学　崎原　秀樹（6715）

田畑　洋一　（鹿児島国際大学・1412）

キーワード：コミュニティ･ソーシャルワーク、学内学会誌「ゆうかり」編集、何でここにいるのか

１．研 究 目 的

崎原・他(2008a)は学内学会機関誌「ゆうかり」を中心とした 5 年間の活動をコミュニティ・ソーシャルワークの視点から検討した。学生やその先輩たち、同僚との間で、先輩達を迎えたシンポジウムやエッセイをはじめとした企画が、学科教育との関連でどのように進んできたかを分析した(崎原,2008b,2011)。今回は、2011 年度の企画の一つを取り上げ、当時の留学生、チューターの学生、ソーシャルワーク演習Ｉの学生、国際交流センター(現・国際交流支援委員会)、学科長の共同作業を紹介して、検討したい。

２．研究の視点および方法

本報告では、学科教育の場を、学生と教員が共通の目標を持って過ごす擬似コミュニティと捉えたい。学科社会福祉学会はカリキュラム等の学科教育の縛りを離れて、学科教育を活性化するためのアソシエーション組織と言えよう。したがって学科教育と学科学会活動をつないで、より豊かな学科教育の場を作っていく一連の取り組みをコミュニティ・ソーシャルワークの視点から捉えたい(崎原, 2008a)。

３．倫理的配慮

本企画にかかわった人と、語りや記録に登場した情報について日本社会福祉学会研究倫理指針にそって内容の検討を行い、支障がない限りで事実関係の省略や変更を行った。

４．研 究 結 果

筆者(第１著者)が、学科出身大学院修了生で当時・国際交流センター勤務のＯＧと進めていた機関誌「ゆうかり」での企画の実現が難しくなった。代案として 2010 年度秋期入学留学生 2 人と学科学生の交流の機会がもっと作れないかというのが発端。当時の大学院留学生が「ゆうかり第 9 号」に寄稿したようなエッセイを彼らにも書いてもらい学科学生に読んでもらえば、互いの「何でここにいるか」を話し合える場を作れないかと着想した。2011 年 3 月に 2 人だけの新入生ゼミを担当した当時の学科長に企画書を基に相談し、当時・国際交流センター事務課長にも許可を得て、留学生 2 人、チューター1 人、大学院留学生と打合せを行った。チューターも大学院留学生同様、「ゆうかり第 10 号」に寄稿していた。2 人の原稿を基に話し合い、阿部謹也の新入生ゼミでの問い「何でここにいるのか」

(1999)というオープンな問いに答える方向でまとめていけないかと提起した。また前述の大学院留学生から、どのように考えて書くかという意味でも日本語で書いてから中国語に訳した方がよいと助言を受けた。最終的には、2 人の留学生のエッセイ(日本語、中国語)を、2011 年 3 月発行の社会福祉学会機関誌「ゆうかり第 11 号」に掲載する方向で進めた。

筆者はソーシャルワーク演習Ⅰで留学生 1 人の所属するクラス担当に、学科長はもう一人の留学生の所属するクラス担当となった。筆者は「何でここにいるのか」を可能な範囲で出し合い、感じ合うことは、ソーシャルワーク演習Ⅰに求められている面接技術、自己開示、自己覚知の視点とはズレていないと考えた。8 回目に前述の「ゆうかり」の企画趣旨を話し、ロの字型(14 名)に座り一人ずつ「何でここにいるのか」を訊き、さらにその理由を訊くのを数回繰り返す方法で行い、感想を書かせた。翌週は、1 コマ目に各自に先週話した内容を書かせて筆者が紹介した。2 コマ目に留学生に筆者が「何でここにいるのか」をインタビューし、記録を他の学生に取らせた。記録を留学生とチューターに渡し、原稿を作成してもらった。筆者がいくつかコメントと加筆をした日本語原稿の中国語への翻訳は留学生自身に行わせた。日本語と中国語の対応については学生課留学生係職員にお願いした。そこで出てきた気になる点は前述の留学生係職員と相談して日本語・中国語原稿を確定した。その上で執筆者の留学生自身に確認してもらい、「ゆうかり第 11 号」のエッセイ欄に掲載した。もう一人の留学生は途中で中断せざるを得なくなった。

５．考察－手持ちの力で生身の関係を重ねることから

学内の他部署や学科長、大学院担当教員との日頃から立ち話での思いつきが発端で、今回の企画で実現した。計画を立てる際、上空から俯瞰するかたちで客観的＝他人事のような視点の必要性は否定しない。しかし、企画を現実化するには当面する条件を整理してどのようなかたちでなら、どこから何を進められるのか、目途の立たない目の前の状況と向き合って一つ一つ試行錯誤するしかない。仲間や学生と廊下や通り道での立ち話を含めて途中経過を話し合い、交通整理し、その向こうに企画の到達点を探るしかないと作業を進めてきた。それは専門や適任とは何か、ユニバーサルデザインとは何かを問い直す作業でもあった。このような企画の進め方を一部の構成員(学生・教員)に依存しないで、学内学会組織の中で互いに頼まれたら、無理のない範囲で分担し合える関係の構築が喫緊の課題であろう。それは学生が卒業後、学科の外にある福祉のかたちを模索する際の原体験になるからだ。コミュニティ・ソーシャルワークの視点からの教育や活動の成果も重要だが、それを生み出す活動プロセス自体が福祉文化の創造過程ではないだろうか。

文献:阿部(1999)大学論 3-10pp.　崎原他(2008a)日本社会福祉学会第 57 回大会(CD-ROM 版).崎原(2008b)随筆かごしま 30-33pp.　崎原(2011)ゆうかり 10 号 101-105pp.**謝辞**：当時の学科長天羽浩一、国際交流センター深道涼子、学生課留学生係王霞、留学生の周静、チューターの蓑田沙紀、2011 年度ｿｰｼｬﾙﾜｰｸ演習Ⅰ(E ｸﾗｽ)の皆さんに深謝する。